

審査概要

本論文の「曾我量深の思想に関する研究」は、曾我の「法蔵菩薩阿頼耶識論」と、「還相回向観」を主軸にして、曾我量深における独特な親鸞仏教理解を考察し論究するものである。本論文の特徴は曾我の資料に丹念に当たり、主観的心情を抑制しながら曾我の思想の論理化を進めているところに大きな特徴がある。その論究の態度が他の曾我量深論との違いが認められる。

第一章の「曾我における法蔵菩薩の了解」では、第一節「曾我の思想区分」と題して、まず、曾我の思想の区分けと、法蔵菩薩の思索の展開について考察している。これについては筆者は独自の基準を設けて区分している。従来の先行研究での思想の区分けは曾我の生活史や論文の内容により行っている。しかし筆者は曾我の唯識の学びの視点から曾我の思想展開の区分けがなされている。まずこの区分けに筆者の独創性がある。また全体において曾我の思想解明の骨子となるべき者である。それに基づく展開に説得力を持たせた。

筆者はこの区分けにより曾我と唯識の関わりを三期にわけ、曾我の「法蔵菩薩阿頼耶識論」が生み出される思想基盤を明らかにする。前期は、唯識に関する論文を執筆している一九一六年まで。中期は、唯識と法蔵菩薩の關係に言及する論文が見られる一九四二年まで。後期はそれ以降、主に『教行信証』に関しての曾我自身の思索が展開される、この三期にわけている。これにおいて、曾我の唯識と法蔵菩薩の関わりの意味を解き明かしていく方法である。これにより唯識との関わりに一定の理論性をもたらせることになっている。

第二節では、曾我における法蔵菩薩の了解を考察している。曾我にとって法蔵菩薩とはいかなる存在であるのか。その視点は如来を拝む恩寵的信仰から法蔵菩薩を信念の主体と見る主体的信仰への転換が、曾我の法蔵菩薩了解の根本である、と筆者はこの節において確認する。このような筆者の了解はどこで明確になるかと言えば、それが曾我の『大無量寿経』観である。すなわち、曾我の法蔵菩薩論の特徴は、『大経』に説く法蔵菩薩を親鸞の三心釈をとおして、「現在の自己の生存の事実に於て「信心の主体」として把握」（33頁）し、法蔵菩薩を、自我を打ち破って働く信念の主体であるところの主体的信仰への転換が曾我の眼目であると筆者は確認する。ここに曾我の法蔵菩薩論が恩寵主義的な二元論的な解釈を超えて、いわゆる曾我の主体的信仰への転換を明らかにし、そこに曾我の法蔵菩薩観を確認している。本論文の体裁上、必須な確認である。

次に、第二章では、「曾我における唯識思想について」が考察される。第一節ではまず、前段階として「曾我における唯識理解について」が述べられている。曾我の「法蔵菩薩阿頼耶識論」の特徴は如来の本願力によって阿頼耶識を解釈しているということである。つまり、筆者はこの第一節において、曾我が「『大無量寿経』においては救済の根拠を如来の本願力に求め、『成唯識論』では、阿頼耶識や末那識により人間の心の構造を明らかにしていることを明らかにする。このような曾我の問題関心を遡求する為に、筆者は、以下、曾

私の唯識との関わりについて、曾我の著述から具体的に検討する。先ず、第二節では「法蔵菩薩影現の歷程としての三願」を考察する。「法蔵菩薩影現の歷程としての三願」には、法蔵菩薩の三願が阿頼耶識の三位に相当するという独自の説が述べられている。

筆者は、三願と三位にそれぞれの共通点を見出した。そして、阿頼耶識の三位によって三願の構造を明らかにするである。また、筆者は、曾我の説を受けて、阿頼耶識の三位と三願転入の関係を示している。この三位を三願転入に相当させることは、新しい試みである、筆者も確認するように、そのことによって、三願転入を図で表すことができ、三願転入における心の構造が明瞭になっているとすることができる。問題はその妥当性である。それについては、筆者は曾我が論文で提出する二つの独自の節（一つは、阿頼耶識の三位と『大無量寿経』の三願を結びつけていること。二つは曾我が、第二十願は第十八願に裏付けられ、第十九願は第二十願に裏付けられていることである。この二つを検討する中で、筆者は、曾我が「三願を唯識によって独自に解釈している」ことを確認し、そこに曾我の特徴を見出している。これもまた筆者の独自の検討である。

次に、第三節では、「如来表現の範疇としての三心観」を手がかりにして、三相と三心について考察する。しかし曾我の三相解釈は、『成唯識論』の記述から曾我により解釈し当てはめたのではない。それは、阿頼耶識の三相の視点からではなく、本願の三心の視点から解釈したのである。この曾我の視点の絞り込みが、曾我の独自性であることを、筆者は、三心の持つ意味について先行研究を踏まえ、従果向因の考え方を通して検討している。果から因へ、つまり、至心から欲生へ向かう生活である。つまり、罪悪深重の凡夫の自覚に立って生活することである。その生活が、我々が信樂を獲たときに働く如来の回向された真実信心の内実であり、我々の歩む道であると言える。それを補強する意味で筆者はこの節の第六項においては曾我の理論を踏まえる安田理深・仲野良俊の解説を手がかりに、「我々は機の深信に立つことによって、浄土からの働きを知ることができる」と結論づける。曾我の理論を継承者の理解を通して補強乃至は展開しているが、これは一つの試みとして成功していると思われる。

次に、第四節では曾我の八八歳米寿記念講演の「法蔵菩薩」についての考察を行い、『成唯識論』の無覆無記や三法展転因果同時と曾我の解釈を比較している。筆者は、三法展転因果同時の構造から本願と念仏の検討を行い、本願と念仏の関係を図に表している。その骨子となるのが唯識で言うところの「種子」と「現行」である。本願という種子が、念仏という現行として働くことである。本願と念仏の働きを図に表すことによって、我々における本願と念仏の関係、その働きを具体的に提示している。簡潔な展開である。

こうして、第二章の考察から、「法蔵菩薩阿頼耶識論」では、法蔵菩薩がイコール阿頼耶識というだけでは不十分であり、「法蔵菩薩」には、法蔵菩薩の三願、三心の内容があると言える。そして、「阿頼耶識」には、阿頼耶識の三位、三相の内容があると言える。「法蔵菩薩阿頼耶識論」は、法蔵菩薩の発した三願と三心が、我々にどのように働くかということ阿頼耶識の三位と三相、さらには三法展転因果同時によって示すことにおいて、筆者

は曾我の「法蔵菩薩阿頼耶識論」の構造を明らかにしている。独創的な発想であり、論理的でもある。

次に、第三章において曾我の還相回向観を考察している。還相回向の問題については、曾我の還相回向論が基軸となって、現在においても様々な見解が出されている。それらある意味では概観し総括するのが、本章において筆者が試みようとする曾我の還相回向観である。筆者は、先行研究の整理と曾我の還相回向理解について、還相回向には、「(1) 往相回向から還相回向に回入する」や「(2) 衆生の信を成立せしめる根拠」と二様の理解があり、曾我自身の理解においても、中期と後期で異なっている。曾我は中期においては親鸞と出遇い、後期においては清沢満之と出遇い、その中で曾我の還相回向観もまた展開していったと指摘する。筆者はその確認を通して、さらに、曾我の還相回向観は、流転輪廻の凡夫、無有出離之縁であるという自覚の上に成り立つことを確認する。それは、悪人の自覚という往相から、自然に還相回向の徳が具わるということである。我々は、悪人の自覚の上に立つことによって、すべての人ともものが還相回向だと受け取ることができ、またその自覚の上に自然に還相回向が働いていると考えられるのである、と考察している。この考察は本論文を通して導かれる結論とでも言うべきものであり。長い論文を通して一貫した主題が最後まで貫徹する形で展開している。

以上、三章にわたる曾我の思想の考察によって、曾我の思想の根底には機の深信があると言える。それは、罪惡生死の凡夫という自覚の上に思索を展開していったということである。第一章においては、法蔵菩薩の受け止め方を通して、自己が迷いの存在であることを自覚する。第二章では、三心と三相を『歎異抄』に見られる機の深信によって解釈する。また、第三章においても、還相回向を悪人という自覚から了解するのである。このように曾我の思想の根底には、罪惡生死の凡夫の自覚があると確認し、そこに曾我の思想の独自性を明確に考察するのである。この視点が三章全体を貫いているブレのない論文である。極めて主観的理解を抑制しながら簡潔に展開する展開に曖昧なまま受け止められていた問題をはっきりと論理立てて筋道を立てる手法が本論文の特徴であり、評価できるものである。しかし安田理深から曾我の教学が「感の教学」とも言われている了解からすると、向後はこの方面も大事に捉えていく必要があると思われる。全体として、曾我の思想を唯識との関わりで展開し、しかも独創的な視点を随所に加え、よく練られた論文であり、よって「可」としたい。

